

あくまでも自分史として

# 「岳陽」と共に

第 63 号

発行日 2025.11.15  
編集・発行 井上講四／堂本彰夫  
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市  
大謝名 3-13-24 教育協働研究所  
～岳陽舎～ (井上講四宅)  
Tel:098-963-9282  
E-mail: gakuyou17@outlook.jp

## ○彼らの活躍に思ったこと?何を見出せばよいのか?

先般の、ドジャース優勝、そして、日本人選手の活躍について、ここでは少し書いておきたい!だが、下手な賛辞や高齢者の暇ぶり?を、高々と披瀝したくはない!要は、優勝(二連覇)、おめでとうとか、三人の日本人選手(大谷・山本・佐々木)の活躍を、日本人として、大変誇りに思うとか、そういうことを言うつもりではないということである(結果的には、そうなるのかもしれないが?)!まずは、純粹に、試合そのものが面白かったし、その中での日本人選手の活躍が素晴らしいことに感銘を受けたということである!

ところで、最早、数多の日本人スポーツ選手が、海外に飛び出し、しかも、その中で、トッププレーヤーの座を獲得していることは、さほど珍しいことではない!隔世の感、極まるといふことであるが、一方では、同じ若者でも、自宅に蟄居し、長い間「引きこもり状態」にある事実もある!何とも言えない光景(コントラスト)であるが、それを、ただ「多様性」や「個性」の名の下に押し殺しておくことは出来ない!生育環境や能力そのものの違いが(努力の積み重ねも含めて!)、そういう一極化現象をもたらしているわけではあるうが、何とかならないものかと、つくづく思つたりもする!

余談?だが、今回私は、三人の選手の表情に、一つの興味を抱いて見ていた!大谷選手の、屈託のない表情、まさにプレーそのものを楽しんでいた!山本選手は、あまり表情の違いは感じさせないが、淡々と、自らの投球をしていました!佐々木選手は、まだ、どこか不安げな表情で、大丈夫かなという思いを感じさせていたが、どうにか、彼の持つている力を發揮していた!いずれにしても、みな流石であった!

## ○ついでに、こんな記事まで見つけてしまった!

そんな中、こんな記事まで見つけてしまった!それは、上記山本選手のことであるが、「優勝後に山本はこれまでトレーニングを指導してもらつた柔道整復師でトレーナーの『矢田先生』こと矢田修氏に感謝の言葉を並べ、ポストシーズンでの2試合連続完投、WSでの連投とフル回転の裏には常に矢田氏の存在があつたと明かしている」とあった(東スポWEB。11/5)。

「山本はオリックス入団後に大阪で治療院を営んでいた矢田氏と出会い、逆立ちトレ、やり投げトレに取り組んできた。日本でトップを極めてドジャース入りし、矢田氏も渡米して指導を継続。軟体動物を思わす地味なフィジカルトレーニングがナインに衝撃と刺激を与えた。矢田氏は『ESPN(スポーツ専門チャンネル)のジェフ・バッサン氏に『由伸がやろうとしているのは600種類の筋肉を10%の出力で使うこと。一度に600個のことを考え投げることはできないで動きの中で優先順位をつけることを学ぶのです』と話している」ともあった。

「過去には戻れない!だが、自らの「生」は回収できる!」N H K の番組(総合)『Dear にっぽん』には、ほとんど毎回感動させられるが、今回のそれには、何故か、それ以上のものを感じさせられた!それは、「描く、もう一度生きる~熊本・人吉~」というものであつたが(10月26日(日)午前8時25分から/全国版、番組内容自体はうまく伝える)とができないので、以下、いつものように、ネット上の紹介記事を挙げる!

「画家の吉田紀子さん(56)。長く精神疾患に苦しみ、孤独な面を激しいタッチで描き続けてきた。10代の頃から自宅に閉じこもる日々を送ってきた吉田さん。父を亡くし、母も入院して孤独を深めるなか、数年前、初めて絵の展覧会を開き、新たな一步を踏み出そうとしている。さりげなく支えるのは地元、熊本・人吉市の人たちだ。閉ざされてきた世界から歩み出て、新たな人生を歩もうとする中、紀子さんの絵は変わろうとしている。」

番組中での彼女の喋りとか表情とかが、まったく紹介できないのが残念であるが(今回は、特にそう思う!)、一人の人間の生き様、過去には戻れない哀しさ、だけど、今、何か大きな地殻変動が起きて、自らの生を生き直そうとしている彼女の姿が、この種の番組にありがちな「何とも言えない圧迫感(適切な表現ではないかも)」が、不思議と感じられなかつたのである!!親(確かに両親は元教師だった!)の生の枠(制約?)の中でしか生きてこれなかつた「いたいけな少女」が、やつとその轍から解放され、自らの生を取り戻そうとしている(親との関係性を含めて?)!!私は、そのように思えた!!

人は、自らの境遇に支配されながら、まずは生きていかなければならぬ!親子関係が、その最初であるが、多くは、それを出発点としながら、様々な人間関係を獲得していく(結婚相手は、その典型である?)!だが、病気や不慮の事故等によつて、その獲得が難しくなることもある!否、それ 자체が、悲しみや苦しみをもたらすこともある!今回は、いわゆる「障害を乗り越えて」というようなことよりは、可能であつた「様々な人間関係」が、いつも(再)構築できる(たとえ相手が故人であつても!)?そういうメッセージであつたようにも思える!だから、いつもと違つた?

○あー「生涯学習」よーそれはそれでよいのだ?!

さて、妙などうで、「生涯学習」に出くわした！作家の佐藤優氏（元外務省主席分析官）の『定年後の日本人は世界一の楽園を生きる』(Hanada 新書)が紹介されていましたが(PRESIDENT Online 第一回)、「社会人の学び直し(リスキリング)が注目を集めている。具体的にどんな勉強をすればいいのか」ということで、「…過去に学んだ知識を呼び起こすのがいい。…高校の教科書やオンライン講座などを利用して…自由に楽しく学び続ける」とが、定年後もつづく生きがいに…社会人は『英語』の勉強はしなくていい…と語る同本が、注目されたのであろう？！

一定年後人生を豊かにする学びの習慣／いくつになつても学習し続けることは、もはや当たり前／生涯学習は、もう特別なものではなくなつた。学習意欲を持ち、学び続けることは、人生を豊かにし、また社会全体にも寄与／その際は、自分の得意な分野を深掘りする。あるいは若いころに苦手だった分野や、また事情があつて進めなかつた分野の勉強をするなど、何でもあり・学ぶ目的も学び方も、人それぞれ；ただし、このとき、定年後に学ぶべきことを、まずは明確にして箇条書きにすべき」ともある。

一言で教養は、目的があるほど身に付きやすい：・外国で仕事をするために英語を習うのと、単に余った時間で漠然と英語を習うのとでは、身に付き方に大きな差…そこには年齢という条件が：定年後に基礎から語学を習おうと思つても、それは無理・勉強すること自体が楽しいのであれば、…良い。…生涯学習とは、広い概念で、自分のキャリアとは運動せず、自分の関心を深掘りして、生きがいにすること…趣味、スポーツ、芸事などを、無理なく楽しく学ぶこと…教養を深めたい、知識を増やしたい、勉強することと自体が楽しいという人にピッタリなのが生涯学習だ。」

読めば読むほど、まったくの同感であるが、「生涯学習」という言い方（概念）は、これは「これでよいのだと、改めて納得した次第である（あれほど拘つてたのに！笑）！」

○同じ待つでも、「信じて待つしかな」ものもある。

先に、「待つこと」の意義（楽しさ？）について書いたと思うが（私草本ではないかもしれないが？笑）、同じ待つでも、自分ではどうしようもないそれがあることに、改めて気づかされている！その一つが、「教育協働アカデミー」のことであるが、今月のそれが終わった後、来月のことについて、参加者の二人（ヨアメンバー）に、内容と、その準備を委ねることになった！自らが動けばよいのだが、思い切つて彼らに任せたのである（今は、それしかない？）！結果は、どのようになるのか？少し（否、大いに？）心配なことがあるが、待つしかない！そう思つての決断である！！

特別コーナー 堂本彰夫の古代史旅枕63

○突然だが、「」で「高天原神話」を探る?—その3—  
といふことで、記紀神話といわけ「高天原神話」には、その編纂當時の勝ち組と負け組の関係と構図が埋め込まれてゐる(暗喩)といふことであるが、問題は、實際の、その両者の構成能力と、その出自である!!「高天原系(天津神)」と「出雲系(国津神)」といふように分けられてはいるが、最終的には、前者が、後者を、いわゆる「国譲り」させて、その覇権を奪取した形となつてゐる(少なくとも「天孫瓊杵尊」の降臨前までは!)。ただし、その形や場所、そしてプロセスは、何とも言えない奇妙なものである(その最大のものが、「天孫降臨(の地)」であることは言つまでもない)!尤も、「天孫降臨」 자체は、實際にはあり得ない話なので(物理的に不可

能!)」、その形やプロセスは、おそらく「海外からの渡来」のことであると思われる。そして、渡来後の勢力拡大、あるいは他の「先住勢力」の驅逐のプロセスを、そのように譬えたところが、今のことば、それは、最後に渡来してきた「百濟系」(北方扶桑系?)の勢力が、先に渡來していたと思われる「伽耶・新羅系」(いわゆる「倭人・古越系」あるいは「南方系」?)の勢力を凌駕していったことを指していると捉えていたが、その具体は、まだまだ五里霧中ではある(「倭奴国」や「伊都国」、さりには「邪馬台国」や「狗奴国」の表態体)も、大いに関係している!)。そこで気になるのが、やはり「三貴子」の存在である。なかでも、実は、「素戔嗚命」も天孫なのに、何故か「田霧系」となっていること、そしてそれよりも何よりも、その「三貴子」の一人に「月読(あみ尊)」がなつていることである。おそらく、それは、謎の豪族「秦氏」のことを指していると、私自身は推測しているが(ほぼ間違いない!)、「天照大神」は「左目」、「素戔嗚命」は「鼻」からとされていて、「月読尊」は「右目」から生じている。それが、実際、何を意味するかなのである!!

ちなみに、その「元ネタ(モチーフ)」は、実は他の国にあり、この物語は、それを借用したもののようにも思えるが、繰り返すように、そのねらいは、最終的には、勝利した側(天照・天孫族・天津神)と敗北した側(素戔嗚命・出雲族・国津神)の歴史を、言わば対称・相補させながら描くことであったと思われる!! ((べへ))

〔編集後記〕 今回も一応紙面を埋めてはみたが、「我が生」を重ねつつ、書きたいことは山ほどある。不見限!! (井上)  
草本